

ポジティブリガードが体験過程の促進に及ぼす影響

本研究の目的は、聴き手がどのような関わりで、話し手に自身の体験に対する肯定的な態度(ポジティブリガード)が生じるのかについて検討することである。なお、本研究では、話し手自身がこれまで考えたことや感じてきたことから距離を置き、改めて今、ここでどのように感じているかということに探索的・受容的に注意を向ける態度を、ポジティブリガードの状態と考えた。方法は、Klein, Mathiew & Kiesler(1985)によって開発された EXP インタビューを用いて面接調査を行った。面接終了後、面接協力者と共に、面接内容を録音したものを再生しながら、ポジティブリガードが生じた発言箇所について、きっかけやその時の心理状態などについてインタビューを行った。面接内容の分析は、面接記録を逐語記録として文章化し、体験過程スケール(以後 EXP スケール)(Klein et al,1985)の日本語版評定(池見・田村・吉良・弓場・村山, 1986)による評定を行った。ポジティブリガードが生じた4名の7セグメントの逐語記録、EXP 評定を事例として提示した。事例検討の結果、ポジティブリガードが生じるきっかけとして、面接者が、自身の内面に直接照合をしながらリフレクションを行う、アスキング、ハンドル表現、ゆっくり受け止める姿勢の4つの関わりが示された。また、面接協力者のポジティブリガードが生じなくなった際、面接者が、再度傾聴の姿勢に戻り、丁寧な関わりを行うことで、再び面接協力者のポジティブリガードが生じることが示された。